



私の中の土木

片桐知子

(株式会社プロシード 代表取締役)

私は大阪でイベント制作の仕事をしています。

梅田のビッグマン前で新車の展示とともに、「ほーらこんなふうにカギを差し込まなくても車が開くんですよ」とマイクを持ちながらしゃべってるきれいなおねーちゃんのまわりで、ミニスカートをはいたおねーちゃんがグッズを配っている光景に遭遇したことはありませんか？

わやわやと人だかりがしているので、何かと見に行けば、ステージの上でゲーム製作者がゲームの攻略法について語っていたことはありませんか？

これはほんの一部ですが、こういうものの様々な手配から制作、運営までをするのが私の仕事です。

10数年前、近畿地方建設局（現近畿地方整備局）のとある国道事務所の呼びかけで土木の日実行委員会というのが立ち上げられ「土木と暮らしの週間」を記念したイベントをすることになりました。その企画から制作一式を受注したのが、私と土木の最初の出会いです。

それまで、土木ということばを知っていてもそれ以上について考えたことは皆無でした。そのイベントで私は、なぜ11月18日が土木の日なのかを知り、感心したことを覚えています。

では、ここで突然問題です。なぜ11月18日は土木の日なのでしょう？（答えは最後に）

さて、このイベントは近畿地方建設局の全事務所をはじめ、地方行政など多数の団体が一同に会し、それぞれの事務所がどういう事業に携わっているかをパネルや模型などを展示するとともに、職員が来場者に説明するという形式をとるものでした。まだ説明責任とか合意形成とかそんなフレーズが出る前でしたが、職員の人たちは慣れない仕事に戸惑いながらも、結構、来場者とのコミュニケーションを楽しんでいる人が多かったように思います。

確か、最初の年のイベントのタイトルは「浪漫 of DOBOKU」だったように記憶しています。これは、土木に対してズブの素人の私が「土木事業」のほんのさわりに触れて、「なんだか、土木ってロマンがあるなあ」と単純に感じたことがベースになっています。

そして、阪神大震災が起こった年は、「土木は人」という強い思いにとらわれ、人を通して土木を紹介することをテーマに「もっとひゅーまん DOBOKU」というタイトルにしました。

それ以来、いろんな土木事業に関する広報イベントをお手伝いするようになりました。

もっとも印象に残っているのが、近畿地方建設局主催による全国の小学生を対象にした作品コンクールです。これは阪神大震災の翌年に実施したのですが、被災地内外の子どもたちのエール交換のようなものがテーマになっています。沖縄から北海道まで多くの子どもたちから毎日届く作文や絵画の整理作業をしているにもかかわらず、つい手を止めて作文を読んでしまい、不覚にも泣いてしまったことを思い出します。

表彰式と祝賀パーティを神戸で行い、地元の小学生も招待して交流をはかり、翌日はまだた

くさん震災の爪あとが残る神戸の町のツアーをして、被災地の生の様子を子供たちに見てもらいました。

このイベントは「Love(友情) Letter コンクール」と名付けましたが、私のネーミングの中でいちばんのお気に入りです。

以来、様々な土木事業の広報活動のお手伝いをさせていただいてきました。

そして、その中で CVV の皆さんをはじめ、土木のそれぞれの専門家の方々とたくさんの出会いがあったわけですが、土木に携わる人には大きな共通点があることを発見しました。

それは、なぜか、皆さん一様にとっても熱い点です。

土木に関わる人は、老若男女問わず、気持ちいいくらい全てに対してとても熱いのです。それがとても心地よいのが、私が土木に関わる理由かもしれません。

CVVをはじめ、土木の専門家の皆さんに助けていただき、多少の向上を見た私の土木知識ですが、しかしそれはあくまでも表面的なものばかりであることは否めません。

ただ、「どぼくってなんや?」「とけいどうろって、とけいがついでる道路なん? (都市計画道路)」「道や川のことなんて考えたことないねんけど」という多数の人の気持ち側にいてこそ、どうすれば発信者の思いや伝えたいことが伝わるかを提案できると考えています。

まだ、しばらくは現役でいるつもりなので、これからも様々な広報活動のシーンで、土木に関わる人の情熱や思いを伝えるお手伝いをしていきたいと思っています。

◆「なぜ11月18日は土木の日?」の答えはこちら◆

土木の2文字を分解すると十一と十八になることと、土木学会の前身である「工学会」の創立が明治12年(1879)11月18日であることから、11月18日を「土木の日」と制定しました。

(土木学会 HP より引用)

片桐知子氏のプロフィール

CVVのホームページを開くと、最近掲載されたもっとも古い記事が資料箱にある。

発足時の熱き思いの籠もったアンケートとそのまとめである。ここに問い合わせ先として片桐さんの名前が掲載されている。そうCVVの歴史を作ったメンバーの中で実務をまとめたのが彼女で、CVVのロゴマークも彼女の発案である。

それ以後国土交通省のイベント案内などでお名前は拝見していたが、今回はやっと「CVVな女達」第一号として登場していただいた。

彼女の経歴であるが本人申告をそのまま掲載させていただく。

関西大学社会学部産業心理学科卒業後、銀行に入行するが、何か違うような気がして1年半で退職。

好きな英語を独学で続けていたところ、ポートピア 81 で外国人記者の取材活動を手伝う仕事に就くチャンスに恵まれ、半年間神戸に通う。そのポートピア 81 でイベント制作という仕事があることを知り、イベント屋としての人生が始まる。途中いったん、出産と子育てのため専業主婦となるが、33 歳の時に再びイベント屋を再開。

35 歳でプロシードを創立。株式会社に組織変更後、現在に至る。

本文にもあるが、イベント企画の社長業を長く続けているわけでその仕事ぶりは、完全主義とも言えそうな、手抜きなし（出来ない）のものらしい。土木は熱いとの表現を頂いたが、「熱い」の形容詞が一番似合う女性が片桐さんであろう。ますますのご活躍をいのります。

(久保地記)